

2021年5月2日 説教「ヨセフの生涯から学ぶ」

創世記 50 章 22～26 節

ヨセフはヤコブの葬儀を遺志に基づきカナンで行い、マクペラの墓に埋葬をした後、パロと約束したように、エジプトに戻りました。

1. エジプトでの安泰 (22～23 節)

① エジプトに (22) 「**ヨセフとその父の家族とはエジプトに住み**」 エジプトに戻ったのはヨセフだけではありませんでした。その父の家族、すなわち兄弟達もエジプトに戻ったのです。カナンの地に孫の世代は行っていないのですから、戻るのは当然といえば当然でした。既に、エジプトのゴシェンの地に彼らの生活の根拠があったのです。水が豊かで、口を糊することにおいては心配のない所が与えられて、彼らの生活は安定していました。いわば健康的な毎日が送ることができたのです。

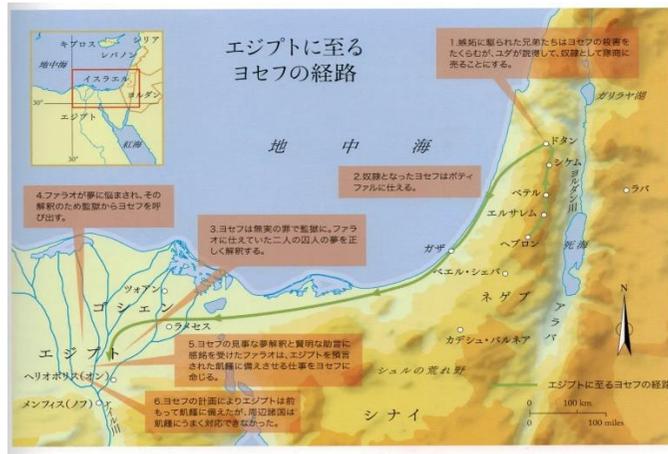
② 百十歳 (22) 「**ヨセフは百十歳まで生きた。**」 そうした歩みの中で、ヨセフはエジプトの要職を続けていたのでしょう。詳しいことはわかりません。ヨセフの生きる姿勢から推測すれば、信仰をもって、秩序正しく年月を過ごしたと思われる。しかし、そのヨセフも命を終える時が来ました。百十歳という老境まで生かされていました。もっとも父ヤコブが、ヨセフの援助を受け、車でカナンの地からエジプトに移住したのは百三十歳でしたから、まだ生きることが出来る年齢でもありました。

③ 曾孫までも (23) 「**ヨセフはエフライムの三代の子孫を見た。マナセの子マキルの子らも生まれて、ヨセフのひざに抱かれた。**」 ヨセフには長男マナセと次男エフライムがいました。ところが、父ヤコブが召される前に、ヨセフ、マナセ、エフライムの三人で病床訪問したところ、ヤコブは意図的に弟のエフライムの頭に右手を置いて祝福を与えたのです (48 章)。ヤコブが召された後の世において、ヨセフはエフライムの子から孫の姿を見、マナセの子であるマキルとその子達の姿も見ることができました。そして、曾孫たちをひざに抱いたのです。

2. 兄弟たちへの遺言 (24 節)

① 死のうとしている (24) 「**ヨセフは兄弟たちに言った。『私は死のうとしている。』**」 そのように、次世代への引継ぎを確かめたヨセフの命も尽きようとしていました。ヨセフは兄弟たちに言ったのです。「私は死のうとしている」。兄弟達はベニヤミンを除けば、皆が彼より年長であります。存命だったようです。年下のヨセフの方が、先に地上での命を終えることになったのです。

② あなたがたを顧みて (24) 「**神は必ずあなたがたを顧みて**」 死の床にあるヨセフが兄弟たちに、神信仰に基づいて、主のご配慮を伝えていきます。神はあなたがたを顧みてくださるという言葉、ヨセフが兄たちに伝えているのです。政治的なことではなく、信仰に関わることを兄



弟達に述べているのです。ここにヨセフの信仰の一端を見ます。また、彼が学んできた主なる神の確信がヨセフを支えていたのです。

- ③この地から (24)「この地からアブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地へ上らせて下さいます。」ヨセフの確信は、神がヤコブの一族を、アブラハム、イサク、ヤコブに主が約束してくださった、カナンの地に上らせてくださるというものでした。これは、結果的にはずっと後の時代になって、モーセの時代にイスラエルの民が、エジプトから脱出し、カナンの地に向かうこととなります。

3. ヨセフの死 (25～26 節)

- ①イスラエルの子らに (25)「**そうして、ヨセフはイスラエルの子らに誓わせて**」カナンの地に一家がやがて帰還することになることを伝えた上で、ヨセフはイスラエル (ヤコブ) の子、すなわちヨセフの兄弟たちに誓いをたてさせるのです。ヨセフは、それほどに約束の地にイスラエルの民が生きるようになり、主の約束が成就することを、心から願ひ、そのために努力しようとしたのです。
- ②私の遺体を (25)「**『神は必ずあなたがたを顧みてくださるから、そのとき、あなたがたは私の遺体をここから携え上って下さい。』**と言った。」ヨセフはカナンの地に兄弟達が行く時に、自分の遺体を運んでもらいたいと要望しています。ここでは述べていませんが、アブラハム、イサク、ヤコブが葬られているマクペラの墓に葬ってもらえればうれしいと暗に願っているのかもしれませんが。
- ③ミイラにし (26)「**ヨセフは百十歳で死んだ。彼らはヨセフをエジプトでミイラにし、棺に納めた。**」ヨセフは地上での命を終えました。その数奇な人生は当時の人々にとってもインパクトがあったでしょうが、後の時代に生きる人々にも励ましを与えるものでした。兄弟たちは、カナンの地に運ぶためにも、父ヤコブと同じように、ミイラにして棺に納めたのでした。

《結論》

私達はここ数年で、アブラハムの生涯を通して、その従う信仰を学び、「主の山の上には備えがある」との御言葉に導かれました。また、イサクの生涯を通して、平和を求めた人イサクを学び、ヤコブの生涯を通してはエサウを欺いた故の痛みを覚えつつ、神を学ばされていった経過を学びました。特に神と格闘したという経験は大きな出来事でした。

それでは、今朝の記事で命を終えたヨセフの生涯を通して、教えられることは何だったのでしょうか。それを三つにまとめます。

第一に、ヨセフの信仰についてです。彼には 11 人の兄弟がいましたが、アブラハム、イサク、ヤコブと続く家系において、彼が最もその信仰の核となるものを受け継いだ人でした。ヨセフは兄弟達がヤコブ

の近くにあったにもかかわらず、十分に継承できないでいた信仰を、遠く離れたエジプトにあって学んでいたのです。すなわち、かつてアブラハムが「行け」と主から言われた時に、行くところを知らずして従った信仰でした。ヨセフは計らずも、強制的に行かせられて、その信仰をいただいたのでした。それは神の恵みでした

第二に、アブラハム、イサク、ヤコブに与えられた主の契約のことです。つまり、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ、わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたの間立てる。わたしは、あなたをおびたたくふやそう」(17:1～2) というアブラハムに与えられた神との契約は、イサク、ヤコブによっても、しばしば確認させられました。そして、その契約は当時の世界を襲った飢饉によって、その民の存在が途絶えてしまう可能性があったのです。しかし、ヨセフが予めエジプトに派遣され、宰相の地位に就くという出来事を通して、この民が守られることになったのです。そして、誰も考えもしなかったであろうエジプトの地において、イスラエルの民は増え広がって、力をつけていくことになるのです。つまり、神から与えられた契約が実現させられていくために、ヨセフの数奇な生涯が用いられることになったのです。ここにも神の恵みをみまします。

第三に、ヨセフの生涯は確かに一人の方のことを指し示していたということでした。そうです、ヨセフの生涯はイエス・キリストを指し示していました。どういうことかといいますと、ヨセフは兄弟達に売られて、エジプトに來ました。環境も言葉も文化も、全く異なる所にヨセフは放り出されて、ヨセフは生きました。その意味も目的も、わからずに主を見上げながら、彼は懸命に生きました。ある時は奴隷として、ある時は獄中であって過ごしつつ、パロの前に引き出されて、宰相の職を得て働くことになりました。そして、それはヤコブの家族が生き延びるための犠牲でありました。

イエス・キリストは、人間が本当の意味において救われるために、犠牲となって下さった方です。すなわち、人間のいかんともしがたい罪を贖うために、キリストは自らを犠牲として投げ出し、身代わりとして死んでくださいました。その十字架の死によって、人間が救われる道が開かれたのです。キリストの復活によって福音は完成しますが、十字架と復活の福音を信じることによって、人間は救われるのです。

このキリストの十字架から復活に至る歩みを、ヨセフの生涯は指し示していたのです。創世記は旧約聖書の福音書という見方がありますが、まさにヨセフの生涯は、イスラエルの民の救いの向こうにある、全世界の民の救いを暗示していたのです。

それゆえに、この創世記の学びを通して、キリストを仰ぐことを学ばされるのです。2016 年の 5 月から、学んできた創世記の学びもここで閉じられることとなりますが、この旧約の書の中にもイエス・キ

リストが啓示されていたということを有難く思います。この期間、教会にもお一人お一人にも、様々なことがありました。喜びもありました。試練もありました。それらをすべて、主の前にお返しつつ、感謝と悔い改めをもって主の前に出て、あらためてキリストへの信仰を確かめさせていただきたいと思います。

「主はいのちを、与えませり、主は血しおを流しませり、その死によりてぞ、われは生きぬ。われなにをなして、主にむくいし。」（讚美歌 332）を歌いつつ、主を仰いでいきましょう。